『フッサール研究』第 20 号（2023）44–66

フッサール現象学の鍵概念（1）――時間

――体験流を中心として――

柳川　耕平
（北海道大学 人間知・脳・AI 研究教育センター）

はじめに

これから現象学を学ぼうとする人、フッサールについて専門的に研究したいという人、専門的に研究したいというわけではないにしてもフッサールについて知っておきたいという人――事情は様々であるにしても、「フッサール現象学について知りたい、それがどういう哲学なのかを理解したい」という向きは多いだろう。そのような潜在的なフッサールへの関心に応え、「鍵」となる概念・トピックからフッサール思想に対する概観を提示しようという意図のもと、「フッサール現象学の鍵概念」企画が始まった。本稿は、2022 年 3 月 12 日に開催された上記企画の第一回目の内容に基づく。当日は、前半が本稿著者による講義で後半が質問・議論・意見交換という形式を採ったが、本稿はその前半の内容を整理・修正したものに相当する。

フッサール現象学において「時間」は重要な問題である。これはフッサール自身も述べていることであり、また多くの先行研究によって指摘されていることでもある。一例を挙げると、D. ザハヴィによる「時間意識の分析は単に多くの分析の中の一つの分析ではない。反対に、フッサール自身のことばではそれは現象学の中で最も困難で重要な研究分野の一つである」（Zahavi[2003 121]）という指摘が見つかる。また、「時間」は単に重要な問題なばかりではなく、しばしば他の議論とも関連し合っているとされる。フッサール自身も、例えば「時間」を判断論や自我論などと関連させて論じている。このように、フッサール現象学において「時間」は最も重要な問題の一つと言える。しかし、フッサールの著作・草稿を一度でも直接読めば直ちに実感できるように、これの分かりにくさもまた彼の思想の中でトップクラスである。

そこで本稿では、フッサール時間論における基本的な概念群、それらを用いた彼の議論、時間論と他の議論との関連を概観していく。具体的には、第一章でフッサール時間論の時期区分と各時期の主要な著作を紹介する。第二章ではフッサールの言う「時間」の多義性・階層性と基本的な諸概念を確認する。第三章では体験流の自己構成の概略を示し、第四章ではフッサール現象学における時間論と他の議論との関連を指摘する。これらを示すことで、完全ではないにせよ、フッサール時間論の概略を示すことを目指したい。

なお、本稿の論にあたっては一つのトピックをできるだけ一つの段落にまとめるようにし、できるだけ他の節や章の内容に依拠しないようにした。また、論述をまとめきれなかった場合には参照指示を付した。つまり、成否は措くとして、「辞書」のような論述を心がけた。ゆえに、必ずしも冒頭から順に読んでいく必要はない。

1. 予備情報：フッサール時間論の時期区分

はじめに、フッサール時間論についての基本的な情報として、彼の時間論の時期区分と各時期の主要文献について確認しておきたい。

フッサールの時間論は、通例、初期・中期・後期の三つの時期に分けられる。R. Bernet および D. Lohmar による全集 XXXIII 巻の Einleitung によると、初期は『内的時間意識の現象学』（以下『時間意識講義』と略記）を、中期は『ベルナウ草稿』を、後期は『C 草稿』を、それぞれ中心テクストとしている（XXXIII xvii-xix）。

『時間意識講義』（全集 X 巻所収）はフッサール時間論における唯一の公刊著作である。M. ハイデガー編集のものとして 1928 年に出版された。しかし元の講義は 1904/1905 年の冬学期に行われ、出版されたものには 1905 年から 1911 年の間、さらには 1917 年に書かれた追加の記述と十三の補遺も含まれており、さらにハイデガーの編集以前、1917 年に E. シュタインがフッサールと共同で編集を行っている（XXXIII xvii-xviii）。この事情から、『時間意識講義』は初期のテクストとして扱われ、またハイデガーによる編集の影響もそれほど大きくはないとされる。ただし、1917 年に書かれた箇所はシュタインとの議論に由来するもので、シュタインは後述する『ベルナウ草稿』の執筆にも無関係ではなく、時期の近さやシュタインの関与を踏まえると、『時間意識講義』の少なくとも 1917 年に書かれた部分に関しては、初期時間論に含まれるかどうか判断の分かれるところであろう。また、全集 X 巻には『時間意識講義』以前に書かれた時間に関する研究草稿が収められており、その中には

1890 年代に書かれたものもある。以上を総合すると、フッサール初期時間論は 1890 年代から 1910 年代前半までの期間にわたり、中でも 1904 年頃から 1911 年頃の考察が中心となっている、と言うことができるだろう。

『ベルナウ草稿』（全集 XXXIII 巻所収）は 1917、1918 年に避暑地のベルナウで書かれた。R. インガルデンの証言によると、インガルデンが 1927 年の 9 月半ばにフッサールを訪問した際、フッサールはこの草稿を「主著」と呼び[1]、反対に『時間意識講義』の草稿に関しては「かなり軽蔑的な意見を述べた」[2]という（Ingarden[1968 154-155]）。このことから、まず、『時間意識講義』と『ベルナウ草稿』とは（少なくともフッサールにとっては）区別され得るもので、それゆえ後者を中心テクストとする中期時間論と前者を中心とする初期時間論も区別されることが分かる。また、この発言が 1927 年のものだということから、少なくとも 1927 年までは『ベルナウ草稿』の洞察は維持されていたと推察できる。以上を踏まえ、フッサール中期時間論は 1917 年から 1920 年代頃までだと考えることができる。

最後に、『C 草稿』（全集 XV、XXXIV 巻および全集資料版 VIII 巻所収）はおおよそ 1930 年代頃に書かれた諸草稿の集合である。全集資料版 VIII 巻の編者序言によれば、フッサールは『ベルナウ草稿』に後続する著作として『C 草稿』を出版するつもりだったらしい（Mat. VIII xiv）。ただし、『時間意識講義』や『ベルナウ草稿』が比較的短い期間に集中的に書かれたのに比べ、『C 草稿』は成立時期が広くまばらで、内容に関しても前者二つと比較してさらにばらつきがあるように見える。とは言え、『C 草稿』において広義の時間に関する議論が展開されていること自体は確かであり、それゆえ 1930 年代にフッサールの後期時間論が展開されていたと言うことができる。

以上のように、フッサール時間論は三つの時期に分かれるということに関しては研究者の間である程度の合意がある。しかし、これはあくまで代表的な著作・草稿を手掛かりにした時期区分であって、思想内容に基づく区分ではない。時期ごとで扱われていた問題が何か、そもそもフッサール時間論の内容が時期ごとに異なると言え

1. この時フッサールはインガルデンに『ベルナウ草稿』の公刊に向けた編集を依頼したが、インガルデンはこれを辞退した。後年、フッサールは E. フィンクに同じ依頼をし、フィンクはこれを引き受けたが、編集作業のために当該草稿は 1969 年までフィンクの管理の下に置かれ、しかも「主著」としてまとめられた形での公刊はついぞ実現しなかった。

2. もちろんこの発言は、当時のフッサールとハイデガーの決別寸前の関係も考慮に入れて理解する必要があるだろう。つまり、これは『時間意識講義』それ自体に対する純粋な評価というより、それを編集したハイデガーに対する不満のようなものも多分に含んでいると考えるべきであろう。

るか、などに関してはまだ共通の見解があるわけではない。ただしそうは言っても、フッサール本人による文献、あるいは彼の時間論に関する研究に接する際、上述の情報を押さえておくことは決して無意味ではないだろう。

2. フッサール時間論における「時間」、基本的な諸概念

さて、本題に移ろう。そもそもフッサール現象学における「時間」とは何か。

2.1. 時間の多義性と階層性

最初に注意しておかなければならないのは、フッサールは「時間」という概念を極めて多義的に用いている、より正確に言えば、フッサール時間論では様々な階層の「時間」が論じられているということである。それゆえ、大雑把に「時間」が話題になっているとまとめることができたとしても、それがどの階層に関する記述なのかを把握していなければ誤解や混乱に陥ることになる。さらに言えば、フッサールは考察の中で「時間 Zeit」という言葉をそれほど頻繁には用いない。また用いたとしても、それが常に話題の中心的な事柄を指すわけではない。以上を総合すると、フッサール時間論を概観する際に「時間 Zeit」という言葉に注目することはそれほど有効ではないし、場合によっては危険ですらある。

ではフッサールは「時間」に関していくつの階層を想定していたのか。フッサール自身がこれに関して最終的かつ明示的な考えを提示しているわけではないが、しかし三つの階層を想定するのが穏当であろう。以下では谷[1998]に倣って、これら三つをより根源的なものから順に「深層」「中層」「表層」と呼ぶことにする[3]。

時間の「表層」に相当するのは「客観的時間 objektive Zeit」であり、これは「世界時間」、「現実的時間」、「自然の時間」などとも呼ばれる（X 4 etc.）。この「客観的 objektiv」という言葉には二つの含意がある。第一に、これはどの意識にとっても同じように超越的に存在する（超越的、間主観的）という含意を持つ。もっともフッサールは、こ

3. ちなみに、『時間意識講義』の第 34 節でも時間構成が三つの段階に区分されているが、これは本稿の三区分とは対応しない。フッサールがここで挙げているのは「1. 客観的時間における経験の諸事物」「2. 構成を行う様々な段階の現出多様体」「3. 時間構成を行う絶対的な意識流」（X 73）であり、大雑把に言えば、経験の対象、経験の対象を構成するところの意識経験、意識経験がその中で構成されるところの意識流という三段階を区別している。つまり、ここで区別されているのは時間的対象の構成における三段階であって、厳密に言えばこれは「時間」の階層性とはやや話題が異なる。

のような客観的時間も、後述する体験流との連関の中で構成されると考えていた。これに関しては第四章で述べる。別言すれば、われわれの意識・経験からどのように客観的（という性格を持った）時間が構成されてくるか、というのが彼の問いの一つであった。つまり客観的時間の成立を分析・記述するため、これに関する予断は考察から遮断される、あるいはエポケーの対象になる（X 4 etc.）。なお客観的時間の一部として、より理念化された「数学的時間」（VI 50）が想定される場合もあるが、その場合も上記の事情は妥当する。以上に対し、「客観的」という言葉はもう一つのやや異なる含意を持つ。すなわち客観的時間は客観にとっての時間、より踏み込んで言えば、客観が可能になる経験の形式としての時間といった含意を持つ（X 64, 296, 297 etc.）。この含意ゆえに客観的時間は、何らかの客観が客観として経験・意識されるための条件としての性格を持ち、最も根源的ではないにもかかわらず、それなりの重要性を持つ。

時間の「中層」は「体験流 Erlebnisstrom」であり、これは「時間流 Zeitstrom」や「意識流 Bewußtseinsstrom」、あるいは単純に「流れ Strom」や「流れること Strömen」などとも呼ばれる。「～流」「流れ」「流れること」に関して-fluss, Fluss, Fliessen という言葉が使われることもあるが、基本的には同じものを指すと解釈できる（以下では体験流と呼ぶ）。この体験流に関して、フッサールは『時間意識講義』の中で、「意識の流れにおいて〔…〕流れそれ自体の統一が一次元的で疑似 - 時間的な[4]秩序として自らを構成する sich konstituieren」（X 82）などと述べている。つまり体験流は、ある種の秩序を持った統一体として自らを構成するという特徴を持つ。また、『イデーン I』（1913 年）では「どの体験も一つの無限な『体験流』に属する」（III/1 182）という記述も見られる[5]。フッサールは知覚経験が有する時間的構造の分析から体験流の自

4. この場合の「疑似 - 時間的」は注意が必要である。フッサール現象学においては空想に関連するものに「疑似 - quasi-」という形容が付く場合が多いが、この箇所では空想が主題になっているわけではない。解釈するに、ここでは体験流の自己構成が論じられており、客観的「時間」はこの体験流の自己構成に依拠して成立する。それゆえ体験流の記述に際し、客観的時間に由来するような表現を用いることは不適切である。「時間的 zeitlich」という表現もこの点で避けられるべきだが、苦肉の策として、フッサールはこれに「疑似 - 」と付して不適切さを和らげようとしたのだろう。なお関連する例として、フッサールは客観的時間における同時性（たとえばバットとボールがぶつかることと、カキーンという音）は gleichzeitig と形容するが、体験流における同時性（原印象・予持・把持が一体となって働いていることなど）は zugleich、場合によっては vorzugleich と形容する。これに関しては谷訳の『内的時間意識の現象学』における谷の指摘がある（フッサール[2016 59, 230, 360 etc.]）。

5. ここでは、それぞれ別個の体験が寄り集まって体験流となると述べられているように見え、諸体験の集合としての体験流とその構成要素としての個別の体験は区別される、という含意があるように見える。しかし、ある体験（たとえば 100m 走）は、複数の体験（スタート合図を待つ、トップスピードまで加速する、ゴール後に立ち止まって息を整えるなど）に切り分けることができるし、反対により大きな体験（予選→決勝→表彰の一連、競技大会全体など）

己構成を考察していた（X 80ff.）。このことを踏まえると、知覚の時間的構造から体験流の自己構成が可能になる、とフッサールは考えていたようである。知覚の時間的構造、そして体験流の自己構成に関してはそれぞれ後述する。

最後に、時間の「深層」は「原時間 Urzeit」（Mat. VIII 4 etc.）、あるいは「生き生きした現在 lebendige Gegenwart」（ebd.）と呼ばれる。これは体験流の自己構成に先立ち、これを可能にしている最も根源的なものとされる。この問題に取り組んだ研究としては Held[1966]が特に有名であり、この研究では主に後期『C 草稿』が手掛かりとされている。この研究によると、「深層」である「生き生きした現在」は体験流の自己構成を可能にするがゆえに、体験流の自己構成に先立ち、この意味で先時間的 vorzeitlich などと形容される（Held[1966 112-118]）。また、これは体験流を可能にするものとして体験において常に働いており、反省において常に見出され得る。適切な反省に対しては常に与えられるという意味で「立ちとどまる」と形容される（Held[1966 63, 126-128]）。他方で、反省という、何かを知覚的に捉える、つまり時間的な性格を付与してしまう働きによって捉えられることで「流れる」という性格をも持つ（Held[1966 63, 79 etc.]）。結果、両方の性格を持つということで「流れつつ立ちとどまる」と形容される。ただし、体験流の根源であるはずのものが「流れる」、つまり時間的な性格を付与されてしまうというのは極めて奇妙である。それゆえ Held はこれを「謎 Rätsel」（Held[1966 94]）と呼ぶ[6]。

フッサール時間論では、以上のような「時間」の三つの階層が論じられている。ただし以下では説明の都合上、「中層」の体験流に注目する。これを扱うことで「時間」の各階層、ひいてはフッサール時間論全体を、大まかにではあるが、見渡すことができるだろう。そこで次の章からは体験流に焦点を当て、体験流はいかにして自己構成するか、体験流によって何が可能になるか、という二つの問いに即してフッサール時間論を概観していく。ただしその前に、これらの議論に必要な最低限の諸概念を確認しておく。

2.2. フッサール時間論における基本的な諸概念

先述の通り、体験流の自己構成は知覚経験の時間的構造に基づく。フッサールによ

の中に位置づけることもできる。つまり、体験流とその構成要素としての諸体験を区別することは不可能でありまた不合理である。言い方を変えると、ある体験はそれ自体ですでに他の諸体験と連関し、また、それ自体ですでに体験流である（時間的秩序において統一されている）、と考えるべきであろう。

6. ただし、これに対しては佐藤[2019]が Held[1966]の見解に対して反論している。

れば、知覚経験は原印象、把持、予持という三つの志向性から成り、これらが知覚の時間的構造を成している。

「原印象 Urimpression」とは、まさに今生じているものを捉える働きである。後述する把持および予持はこれが切れ目のない仕方で・連続的に変様したものであり、それゆえ上述の三つの志向性のうちで最も基礎的・根源的なものとされている。なお、中期『ベルナウ草稿』ではこれの代わりに原現前 Urpräsentation という表現が登場するが、同一の事柄を指すと解釈できる。

「把持 Retention」とは、原印象においてまさに今捉えられたものをそのまま保持している働きである。これは原印象の連続的な変様態であり、原印象と不可分に結びついて過去地平を形成する。原印象が把持へ変様する際、捉えられているものはまさしく「保持」されているのだが、しかしまさに「保持」であるがゆえに、原印象における生き生きとした様が把持においては失われている。これに関しては次節で述べる。なお、この変様、および原印象と対比された把持が「準現在化 Vergegenwärtigung」と表現される場合もあるが（XXXIII 4 etc.）[7]、フッサール時間論全体で見るとこのような言葉遣いは主流ではないし、別の箇所では「把持は準現在化ではない」と明確に述べている（XXXIII 55）。準現在化に関しては後述する。日本では過去把持と訳されることもあり、過去へ向かう志向性だと説明される場合がある。この説明は決して誤りではないが、その場合は把持によってはじめて過去地平が可能になる（つまり、把持は予め成立している過去を志向しているわけではない）ことを押さえておく必要がある。また、初期時間論ではフッサール自身が把持を一次想起 primäre Erinnerung と表現する場合があるが（X 30, 294, 310 etc.）、一般的な想起、「二次想起 sekundäre Erinnerung」（X 35, 166, 291 etc.）とは区別される。これについても後述する。フッサール自身も、中期『ベルナウ草稿』の中では、把持を想起と呼ぶことは誤りだと述べている（XXXIII 55）。

「予持 Protention」は、これから原印象において捉えられるであろうものを先取りする働きであり、予持から原印象への連続的な・切れ目のない変様がある。把持が「保持」で予持が「先取り」だという違いはあるが、予持は把持と構造的な同型性を有しており、「逆立ちした」と表現されている[8]（X 56）。すなわち、予持も原印象か

7. 厳密にいうと、「『準現在化する vergegenwärtigende』作用」（XXXIII 4）と表現されている。ただ、前後の文脈から判断するに、これは「現在（原現前）ではなくなる作用」といった程度の意味であり、厳密に術語化された用法ではないのだろう。

8. ただし、この箇所では「予期直観は逆立ちした想起直観」と述べられている（X 55-56）。内容から判断するにこれらは予持と把持を指すと考えられるが、やはりこの点には留意しておくべきであろう。

らの連続的な変様態とされ、原印象と不可分に結びついて未来地平を形成し、把持と想起の同様の関係が予持と予期の間にも成り立っている。ただし、予持には与件内容の先取りの失敗、つまり「幻滅 Enttäuschung」があり得る。本来は予期と区別されるべきであるにもかかわらず、初期では予期と呼ばれていた（「直観的な予期」（X 167））、という点まで共通している。この同型性ゆえにか、初期時間論では予持に関する記述は省略されており、本格的な分析は『ベルナウ草稿』まで見られない。ただし、『ベルナウ草稿』でもこの同型性は必ずしも否定されていない。

上記に関して、三つのことを指摘しておきたい。第一に、この時間的構造によってその都度の現在は「時間の庭」（X 35, 105, 167 etc.）、「時間地平」（III/1 182, X 108 etc.）を伴う。第二に原印象・把持・予持、つまり知覚は感覚与件だけではなく、意識の働きそれ自体をも志向し、前者は「横の志向」、後者は「縦の志向」と呼ばれる。第三に知覚は「現在化」と呼ばれるが、知覚の時間構造と同様の時間構造が、想起や予期や空想などの「準現在化」にもみられる。

まず「時間の庭 Zeithof」[9]および「時間地平 Zeithorizont」に関して、上述の三つの志向性は知覚において互いに不可分な仕方で働いており、〈まさに今〉は〈先ほど〉と〈この後〉を不可分な仕方で伴う。一言で言えば、〈今〉は必ず時間的な幅を伴って与えられるのであり、この幅に相当するのが「時間の庭」あるいは「時間地平」である。あるいは反対の言い方をすると、〈先ほど〉や〈この後〉を全く伴わない、何らの幅も持たない点的な〈今〉は、思考の中でのみ可能な「理念的な限界」（X 40）とされる。なお、初期時間論のフッサールは、この時間の幅をジェームズの言う「fringe」（X 151）によって言い表そうともしていた。

「横の志向性 Querintentionalität」および「縦の志向性 Längsintentionalität」は、初期『時間意識講義』の第 39 節において論じられている。両者は一つの志向性における二重の側面であり、両者一体となって働く。第 39 節ではこれらが把持を題材にして論じられており、本稿の以下の論述もそれに従うが、原印象や予持においても同様の二重性がある。「横の志向性」に関しては、「音に向かう方向をとり、『横の志向性』の中に入り込んで生きる場合、〔…〕持続する音が、それの持続において不断に広がりつつ、現に存立している」（X 82）という記述がある。このことからこれは時間的な客観の構成に関与する、知覚された与件を保持する働きとして解釈できるだろう。また、「横の志向性」は客観的時間の構成にも関与するが、これに関しては第四章で述べる。他方、「把持とは――把持が、まだ - 意識 Noch-Bewußtsein〔＝音がまだ意識されているという仕方で存在している〕だということ、引き留める意識だということ

9. ドイツ語の Hof は「庭」以外にも、「暈」、「廷臣・とりまき」などの意味を持つ。

と一体的に――まさに流れ去った音－把持〔＝音に対する把持〕の把持なのである（X 80-81）」という記述も踏まえると、もう一方の「縦の志向性」は把持それ自身に対する把持だと解釈できる。別の箇所で「縦の志向性」が「流れの経過においておのれ自身との恒常的な合致統一のうちにある」（X 81）とされているのも、同じことを言わんとしていると解釈すべきであろう。この「縦の志向性」、把持自身に対する把持（以下では把持の把持と呼ぶ）は体験流の自己構成に関与するとされるが、これについては次の章で述べる。

「準現在化 Vergegenwärtigung」は知覚、つまり「現在化 Gegenwärtigung」に対して変様態であるとされ、準現在化には想起や予期や空想などが含まれる。予持や把持も原印象の変様態と解釈できるが、これは準現在化と現在化の間の関係からは区別される。簡単に言えば、把持や予持は原印象から切れ目のない仕方で何らの能動性も関与せずに変様したものである（だからこそ原印象・把持・予持は互いに不可分に結びついている）のに対し、準現在化は現在化全体が能動性のもとで「再生」という仕方で変様されたものである。たとえば、何かを想起・予期・空想することはある種の努力によって遂行され、また、通常、これらは必ずしも知覚に結びつかない。これに対し、予持や把持は主体の意図や努力とは関係なく生じており、知覚がこれらを伴わない仕方で生じることはない。これに関連して、ブレンターノは把持・予持を想起・予期から区別していないが、この点についてフッサールはブレンターノに反発している（X 16-17）。また、準現在化は現在化の働きを「再生」する。つまり想起や予期においては「かつての知覚」や「来たるべき知覚」が、空想においては「疑似 - 知覚 quasi-Wahrnehmung」が経験されている。これらは異なる性格（「かつての」「来たるべき」「疑似 - 」）を持つとはいえ、構造的には知覚経験と同型であり、想起はもちろん、空想も（明示的な言及はないが、予期も）知覚と同一の時間構造を有している（X 40-41, 47, EU 200ff. etc.）。想起の対象が位置づけられる時間は知覚の対象が位置づけられる客観的時間と同一である。中期時間論では、空想的な対象が位置づけられるような、いわば疑似 - 客観的時間が想定されているが（XXXIII 336 etc.）、これは「『現実的な』時間」ではないとされ、知覚における客観的時間とは同一ではない（XXXIII 328 etc.）。

基本的な諸概念を確認できたところで、次の章では、体験流はいかにして自己構成するかを概観する。

3. 体験流はいかにして自己構成するか

3.1. 無限遡行と内的意識

前章でも触れたが、体験流は自らを構成するという仕方で成立する。仮に体験流が自己構成によって成立しない場合、「無限遡行」の問題が生じてしまう。

「無限遡行 unendliche Regress」とは、この文脈では、以下のようなものである[10]。仮に体験流が自己構成という仕方で生じない、つまり時間的な秩序とそれに従って統一された体験（これを X_1 とする）が、何らかの他の体験（これを X_2 とする）において構成されるとする。この場合、X_2 も体験である以上、この体験も時間的な秩序に従っているはずである。すると、X_2 の時間的秩序を構成するもう一つ別の体験 X_3 が必要となるが、これもまた体験であり、したがって先ほどと同じことが繰り返される。つまりどこまで行っても X_n に対しては X_{n+1} が想定され、言い換えると、体験流の構成の根源が無限に後退していき、定まらない。以上が「無限遡行」という問題の概略である。

少し脱線すると、上記の問題に関係することとして、フッサール時間論における「統握 - 統握内容図式」およびそこからの脱却が指摘できる。

「統握 - 統握内容図式」とは、認識が内容（＝統握内容）とそれを取りまとめる働き（＝統握）によって成り立っているという認識観のことである（X xxx etc.）。フッサールは当初、時間客観の認識をこの枠組みで捉えていた。すなわち、客観の時間的な性格（「今の」や「過去の」など）は統握内容であり、「赤い」や「丸い」などのような他の統握内容とともに統握されることで、時間的な性格を持った時間客観が成

10. ここでの無限遡行に関する理解は、『時間意識講義』第 39 節における以下の記述を参照した。「かくして、意識流〔それ自体〕も意識のなかで統一性としておのれを構成しているのは明らかである。意識流のなかでたとえば音の持続の統一性がおのれを構成するわけだが、しかし、意識流それ自体がまたもや wieder 音 - 持続 - 意識〔＝音の持続についての意識〕の統一性としておのれを構成する。そしてこの場合、さらにまた weiter auch こう言わねばならないのか。すなわち、この統一性〔＝音 - 持続 - 意識の統一性〕は〔音の持続の統一性と〕まったく類比的な仕方でおのれを構成する、そしてこの統一性は〔音の持続の統一性と〕まったく同様に一つの構成される時間系列である、それゆえやはり、時間的な〈今〉、〈先ほど〉、〈後ほど〉が語られねばならない、と。」（X 80）ここで述べられているのは、対象を時間的なものとして捉える意識それ自体も時間的なものとして構成される、ということまでだ。しかし、「またもや」「さらにまた」などの言葉が、意識の時間的性格をもたらす別の意識が再度生じるのではないか、という懸念を暗示していると解釈できる。

また、同書の補遺 VI、IX においても、反省の問題における無限遡行の問題が登場する（X 111, 114, 119）。補遺 VI、IX は厳密に言えば体験流の自己構成の話題ではないが、しかし問題の構造とその原因が上述のものと同一である。つまり、ある体験に時間的な性格を付与する別の体験を想定してしまうと時間の根源が無限に後退してしまう、という問題である。

立するというわけである。これも、客観の時間的な性格が外的に付与される、体験の時間的性質の根源が体験の外部にあるという点で、無限遡行と類似の構造を持つと考えられる。フッサールは当初、この枠組みを「時間」の問題に当てはめていたが、時期を経るにつれてこの枠組みを自明視しなくなる（X 311ff. etc.）。初期時間論から中期時間論への移行はこの枠組みからの脱却として説明される場合が多いが、この枠組みが廃棄された時期については、細かく見れば、見解の相違がある（X xxxff., Kortooms[2002]、榊原[2009] etc.）。

さて話を戻すと、体験流が体験流の外部の体験によって構成されると考えてしまうと、構成する体験が無限に増えていくことになる。しかし実際のわれわれの体験は、現に時間的な秩序を持ったものとして統一され、しかも件の「無限遡行」は生じていない。これをフッサールは、体験流は別の体験によって構成されるのではなく、体験流自身によって構成されるのだと考えた。かみ砕いて言えば、体験の遂行の外側の何かによってではなく、体験の遂行において・体験の遂行と一体的に、体験の時間的な秩序とそれに基づく体験の統一が成立する。以上が、体験流が自己構成によって成立すると考えられた理由と、自己構成の概略である。では、いかにして体験の遂行それ自体において・それと一体的に体験流はおのれを構成するのか。

前章でも軽く触れたように、体験流の自己構成には縦の志向性、把持の把持が関与しているとされている。ただし論者の見るところ、この把持の把持は内的意識との関係で理解するべきものである。

「内的意識 inneres Bewusstsein」とは、何かを体験する際に、その体験の遂行において・その体験の遂行と一体的に、その「何かを体験する」ことそれ自体を体験していることを指す（なお、「体験」を「意識」に変えてもこれが指す事柄は変わらない）。より正確に言えば、「内的意識」とは体験が体験自身を知覚しているということであり、あらゆる体験遂行に必然的に付随する側面である。これに関してフッサールは「意識とは必然的にそのいずれの位相においても意識 Bewusstsein〔意識されてあるということ〕なのである」（X 119）と述べている。「内的意識」という発想は『論理学研究』においてすでに登場するが（XIX/1 365）、もとはブレンターノに由来するものであろう。なおブレンターノは、意識経験（たとえば音を聞くという意識・経験）において一次客観（音）と二次客観（聞くこと）を指摘したが（Brentano[1968 180]）、フッサールも『ベルナウ草稿』でこの区別を用いている（XXXIII 10, 42）。「内的意識」以外にも「内部知覚」（XIX/1 365）や「原意識」（X 119-120）などと呼ばれる場合があり、フッサールはこの事柄を表現する際に決まった表現を用いていない。ただし、

少なくとも時間論の文脈では、「内的意識」は意識・体験を知覚的に捉えている、という点は一貫して保持されている。そしてこの「内的意識」、つまり意識・体験それ自体を知覚的に捉えていることの中で、問題の把持の把持が生じてくる。

なお、くどいようだが、この「内的意識」はそれぞれの体験遂行と完全に一体的、あるいはそれぞれの体験遂行に必然的に付随する側面である。つまり、これはある体験遂行の外部に設定される新たな体験ではなく、まさにその点が重要である。というのも、仮に「内的意識」をある体験の遂行とは別の体験だと考えると、この「内的意識」に対する新たな「内的意識」が想定され、無限遡行が生じることになる。「内的意識」およびこの後確認する縦の志向性は、これがある体験遂行と一体であるというまさにそのことによって、新たな体験を必要としていない。たとえばリンゴを見るという体験は、「見るという体験」に対する体験を必然的に付随させており、これが「内的意識」である。以下は論者の解釈だが、おそらくこのとき「『見るという体験』に対する体験」に対する体験を見出すことも可能なはずだ。しかし「内的意識」が体験遂行と一体であるということを踏まえると、「～に対する体験」をいくら増やしても新しい体験が増えるわけではなく、あるのは「リンゴを見るという体験」だけである。ゆえに「内的意識」という発想は、無限遡行を解消しているというよりも無害化していると言える。あるいは、より積極的な言い方をすれば、「内的意識」という発想によって、体験におけるある種の重層性が（それも新しい体験を無闇に登場させることなく）見出されるようになった、という言い方もできるかもしれない。

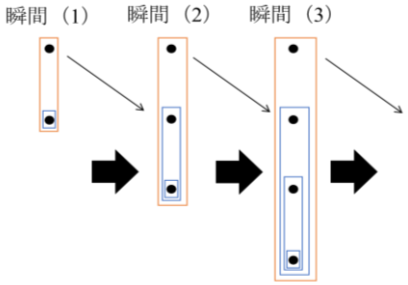
3.2. 縦の志向性の働きの内実

前節で確認した内的意識を念頭に置くと、把持の把持、つまり縦の志向性はごく大雑把に次のように解釈できる。以下ではひとまず『時間意識講義』に依拠し、知覚経験における原印象と把持に関してのみ説明を行う。

①まず、ある瞬間（1）の知覚においては原印象・把持が働いているが、内的意識を考慮に入れると、これらの働き自体も知覚されていることになる。正確に言えば、瞬間（1）において生じている原印象・把持は、内的意識における原印象によって捉えられており、したがって原印象の原印象、把持の原印象が生じていることになる。②次の瞬間（2）には新たな「まさに今与えられたもの」が生じるが、このタイミングで瞬間（1）の内的意識における原印象だったものは、瞬間（2）の内的意識における把持へと変様する。つまり原印象の原印象→原印象の把持（これは短く把持と呼ばれる）、把持の原印象→把持の把持という変様が生じる。瞬間（2）で新たに与えられたものに対する原印象も含め、知覚の働き全体が再び内的知覚における原印象にお

いて捉えられる。つまり、原印象の原印象、把持の原印象、把持の把持の原印象が生じる。③以下、同様のことが繰り返される。まとめて言えば、いずれの瞬間においても知覚全体が原印象において捉えられ、次の瞬間にはその原印象が丸ごと把持へと変様する、ということが不断に生じる（X §38, §39 etc.）。これを図で表現すると図 A のようになる。

なお、内的意識の働きによって捉えられたその都度の原印象、つまり知覚経験の諸々の部分は「位相 Phase」と呼ばれる。図 A で言えば、それぞれの瞬間において縦に並んでいる黒丸が「位相」に相当する。位相は客観的時間における「時間点」（別の表現では「瞬間」）とは区別されるが、これに関しては第四章でも確認する。



図A

3.3. 体験流の順序的秩序と統一

以上の説明は三つのことを含意している。

まず、この内的意識は体験・意識の諸位相に順序的な秩序をもたらす。その都度の知覚の働き全体（原印象と諸々の把持）は常に内的意識の原印象において捉えられ、その後にそれがそのまま把持へ移行するのであり、言い換えると内的意識の原印象・把持は体験の諸位相全体にかかる。それゆえ常に、先に登場した位相（図 A では下の方にある黒丸）の方が、後に登場した位相（図 A では上の方にある黒丸）よりも内的意識の把持を多重に受ける。それぞれの位相は、内的知覚の把持がどの程度重層的にかかっているかに応じて、あるいは不適切な表現であることを承知で言えば、「～の把持」が何重であるかに応じて、順序立てられた仕方で秩序付けられる。つまり、意識・体験に順序的な秩序がもたらされる[11]。

第二に、内的意識は体験・意識の統一をもたらす。ある瞬間における体験の全位相は、内的意識の原印象によって捉えられ、そのまま把持において保持される。言い換えると、知覚体験のそれぞれの位相は、一つの働き（内的意識の原印象）において統

11. あくまで論者の見立てだが、このような位相間の順序的秩序は、位相の個体性をもたらすと考えられる。すなわち、諸位相間の順序が維持されることで、ある位相と別の位相は（順序によって）互いに区別される、つまり位相の個体性が成立すると考えられる。これはそのまま客観的時間の時間点の個体性に受け継がれると考えられる。なお、フッサールは時間点の個体性の成立に感覚が関与すると考えていたが、この考え方では未来の時間点および空想における疑似 - 時間の時間点の個体性が説明できなくなるように思われる。これについては柳川[2021]を参照せよ。

一され、しかもその統一は内的意識の把持において保持されつつ、新たに生じてきたものとともに再び一つの働き（内的意識の原印象）において統一される。つまり、内的意識の働きによって、体験・意識はバラバラに散逸せずに統一されている。

最後に、以上のすべては内的意識、つまりいわゆる二次客観を捉える意識の働きによって成立し、いわゆる一次客観を捉える意識の働きは関与していない[12]。もちろん、内的意識は単独の体験ではなく、何らかの客観を捉える知覚において、それと一体的に生じている。ゆえに、何の一次客観も生じていない場合（もっとも、そんな場面はほとんど想定不可能なのだが）には、そもそも内的意識が生じないため、順序的秩序と統一は生じない。しかし、一次客観が生じてさえいれば、その内容が何であったとしても上述の順序的秩序と統一は常に成立する。フッサールの枠組みでは、体験の内容がどのようなものでも（いかにショッキングでも、いかに退屈でも、いかに素晴らしくても）、体験は順序的な秩序を持った統一体として成立する。

ただし以上の説明に関して、断っておかなければならないことが三つある。

第一に、上の説明では把持の重層化が離散的・デジタルに生じているように見えるかもしれない。つまり、たとえば「～の把持」×2 の位相と「～の把持」×3 の位相があり、その間にはあたかも位相が存在しないかのように見える。しかしこれは本稿の説明の欠陥である。まずフッサール自身は、これが「連続体 Kontinuum」「連続性 Kontinuität」あるいは「連続的 kontinuierlich」であることを繰り返し述べている（X 27, 30, 62, 63, 78 etc.）。つまり、フッサールは位相と位相の間に空虚のようなものを想定しておらす、むしろ最初に切れ目のない連続体を想定し、そこから切り出されたものを位相と呼んでいる、と解釈する方が正しいだろう。思うに、内的意識の把持がかかっていくという事柄は、階段を一段ずつ降りるような仕方でではなく、まさに「沈んでいく sinken」（X 33, 111, 213, etc.）ような仕方で生じていると理解すべきであろう。

第二に、上では『時間意識講義』に依拠して原印象と把持のみを扱ったが、知覚における原印象・把持・予持の不可分な一体性を考慮すれば、予持も考察に加えるべきであろう。すなわち把持の把持だけではなく、予持の予持、予持の把持、把持の予持などについても考察すべきであろう。実際、フッサールは『ベルナウ草稿』において

12. 音を聞く経験を例とすると、一次客観は「音」であり、二次客観は「聞くこと」であり、音を聞くという知覚経験においてはこれらの二種類の客観がいちどきに経験されている（本稿第三章第二節参照）。

これらについて記述している[13]。ここでは詳論[14]を省くが、予持の予持によって体験流における未来方向における順序的秩序と統一性が、把持の予持および予持の把持によって体験流における未来→現在→過去の連続性と統一性が、それぞれ成立する。

第三に、上記は知覚という体験に依拠した説明であったが、そこで重要だったのは内的意識の働きであった。つまり知覚以外の体験が問題になる場合であっても、内的意識が成立する場合には（そして内的意識はいかなる体験にも付随するが）、上述の体験の統一と順序的秩序は成立する。具体的に言えば、上の説明は、絵画を見る体験→窓の外の小鳥を見る体験→別の絵画を見る体験、という一連（あるいはどれか一つの体験）がいかにして順序をもった仕方で統一されているかを述べたものだったが、「別の絵画を思い出す」「小鳥の声を想像する」「2×3=6 だと判断する」などの体験も上記の連続の中に統一され得る（EU 195-196, 204ff. etc.）[15]。

以上より、ある体験・意識の遂行の内的意識によって、体験・意識の順序的な秩序と統一が成立し、しかもこれは体験・意識されたものの内容からの影響を受けない。内的意識、つまり体験それ自体に対する知覚により、体験流はおのれを構成する。

4. 体験流によって何が可能になるか？

第三章では体験流が成立するかを確認したが、このような体験流があることで何が可能になるのか。これはどのような役割を果たしているのか。この問いを扱うことで、フッサール現象学における時間論と他の議論との関係を確認していく。結論から言えば、体験流によって可能になるものとしては、少なくとも、純粋自我と客観的時間の二つを挙げることができるだろう。そしてこれらとの関連において、時間論は、少なくとも、存在論、判断論、自我論、他者論と接点を持つ。

13. 予持の予持に関しては「各々の後続する把持が先行する諸々の把持の系列へと関係するように、各々の先行する予持は、予持的連続体において、各々の後続する予持に関係するのである」（XXXIII 10）、予持の把持に関しては「その際にはしかし、次のことがよく考えられなければならない。すなわち、過程の中途において、各々の把持は以前に充実された予持の把持であり、また、予持の空虚地平の把持でなければならないということ〔…〕である」（XXXIII 14）、把持の予持に関しては「予持はすでに与えられた把持的区間も掴む」（XXXIII 24）などの記述が見つかる。

14. 詳しくは柳川[2017]を参照のこと。

15. 念を押しておくと、体験流には体験が組み込まれ、位置づけられているのであって、体験の対象が位置づけられているのではない。つまり、体験流には、ケンタウロスを空想するという体験、が位置づけられるのであって、ケンタウロスは位置づけられない（これは疑似 - 客観的時間に位置づけられる）。

4.1. 体験流と純粋自我の関係

体験流との関連において可能になるものとして、まずは純粋自我を挙げることができるだろう。

「純粋自我 reines Ich」とは、その都度の体験遂行の主体、「自我極 Ichpol」（I 102, XXXIII 276, 279 etc.）として見出されるもののことである。ただし、上述のように（第二章第二節、本稿の註 5 を参照せよ）、諸々の体験は体験流として統一されるため、一つの体験流に対しては「数的に一つの」（XXXIII 286）純粋自我が見出されることになる。つまり、諸々の体験は内的意識の働きによっておのずから統一され、しかる後に、それらの体験に共通・同一の体験遂行者として純粋自我が見出される。なお、この純粋自我に対しては先述の「数的に一つの」もさることながら、「非時間的 unzeitlich、超時間的 überzeitlich」（XXXIII 278）や「立ちとどまり、そして留まる stehend und bleibend」（XXXIII 280）など、興味深い形容がなされている。『デカルト的省察』ではこの純粋自我が「習慣の基体」（I 100）とされている。すなわち、決心や判断といったその都度の体験は、体験流に組み込まれるようにして保持され、この体験流に対応する純粋自我がそれらを担う。その結果、この純粋自我は「〇〇と決心した自我」「〇〇を××と判断した自我」などとなる。純粋自我に対するこの規定は、打ち消されない限りは当該の自我を持続的に規定し続ける。さらにこの習慣の基体としての純粋自我を基礎として、固有の性格を持った人格的自我が成立する。純粋自我と人格的自我（あるいは、フッサール流の意味における「モナド Monade」）は、密接に関係するものの、区別される（I 102）。

念を押しておくと、一つの体験流には一つの純粋自我が対応し、これを基礎として人格的自我が成立する。言い換えると、同一の体験流に属している諸体験の遂行主体は共通・同一の純粋自我であり、別々の体験流に属している諸体験の遂行主体はそれぞれ異なる純粋自我である。この点は時間論と他者論との関連を確認する際に重要となる。

4.2. 体験流と客観的時間の関係

体験流によって可能になるもう一つのものは、客観的時間である。

フッサール時間論における客観的時間は、「超越的な（意識の外部に存在している）」時間としての性格と、客観が位置づけられる時間としての性格を持つ（第二章第一節を参照）。さらに詳細に言えば、客観的時間は①統一されており（X 69, 70 etc.）、②「一つの堅固な順序」（X 70）だとされており、そして③それぞれの時間点、瞬間が

個体性を持っている[16]。つまり客観的時間とは、それ自身の同一性を持ちつつ互いに異なり合った時間点が、順序立てられて連続的に統一されたものである。「超越的」という性格を持つとはいえ、これも意識の働きの中で、具体的には横の志向性（第二章第二節を参照）によって構成される[17]。横の志向性と縦の志向性とは一つの体験において一体的に働いており、それゆえ客観的時間は体験流の自己構成と対になって生じると考えられる。大雑把に言えば、順序立てられた仕方で統一された諸位相の連続体が、「客観」として捉えられ、「客観的」という性格を付与されることで客観的時間となる。

ちなみに、脱線になるが、客観的時間と体験流との関係が論じられる際、しばしば「時間図表」が用いられる。

「時間図表」[18]とは、フッサールが体験における時間的秩序および統一を考察する際に用いた図のことで、ここには体験流と客観的時間との関係が描かれていると解釈することができる。フッサールは主に初期・中期においてこの図を用いている。初期の図表は概ね直角三角形だが、直角が左上にあるもの（X 210, 230, 235, 412）、直角が右下にあるもの（X 330, 331）、直角が右上にあるもの（X 28, 93, 365、図 B）など、全集 X 巻に載っているだけでも複数種類あり、また例外的ではあるが、三角形ではないものも確認できる（X 399）。とは言え、直角が右上に来るものが代表的な図表として扱われている。本稿オリジナルの図 A も図 B の派生形と言えるだろう。本稿は、この直角が右上に来る図表において、垂直に下に伸びていく線を体験流、水平に伸びていく線を客観的時間として解釈したが、山口

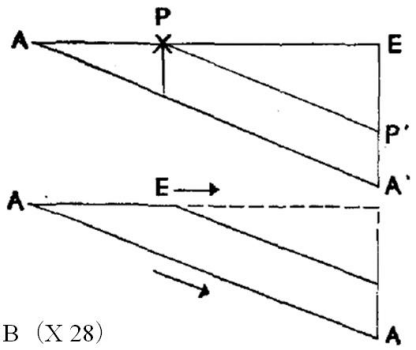


図 B（X 28）

A：Anfang（ある時間客観の開始点）
E：Ende（当該の時間客観の終点）
※「'」は把持的な変様を被っていることを示す

16. ①②は体験流の性質をそのまま受け継いで成立していると考えられる。③の成立に関して、フッサールは『時間意識講義』第 31 節では「感覚 Empfindung」の関与によるものだと考えているようだが、論者の見るところ、このフッサールの見解は問題含みである。本稿の註 9、および柳川[2021]を参照せよ。

17. 「したがって、一つだけの意識流、唯一の意識流のなかで、不可分な仕方で統一的な二つの――ひとつの同じ事象における二つの側面のように――互いを要求する志向性が、互いに絡み合っている。一方の志向性のおかげで、内在的な時間、すなわち、持続するものの持続や変化がそのなかに含まれるところの客観的な時間、真正な時間が自らを構成する。他方の志向性において、流れの諸位相の疑似 - 時間的な秩序が〔自らを構成する〕」（X 83）とされている。

18. 時間図表に関する優れた研究としては Dodd[2005]を挙げることができる。

[2020 24]など、縦線と横線を反対に解釈する立場もある。本稿の解釈では、時間図表は「瞬間ごとの体験流のスナップショットが横一列に（無数に）並んだものとしての縦線と、体験流が下方向へ沈みこむ動きを表現している斜めの線、そしてその都度の原印象の位相同士を繋いで横一直線にひかれることになる客観的時間としての一本の横線」を表すことになる。体験流は本来絶えざる「流れ」だが、それを静的な図表へ落とし込んだ結果、このストロボ写真のような図になったのだろう。中期でも直角が右上にある直角三角形の図表は見られるが（XXXIII 15, 16, 21）、途中からは複数本の縦線と斜め線および一本の横線から成る図表になり（XXXIII 33, 43、図 C）、最終的には横線に沿って紙が山型に折り曲げられた立体的な[19]図表になる（XXXIII 34）。

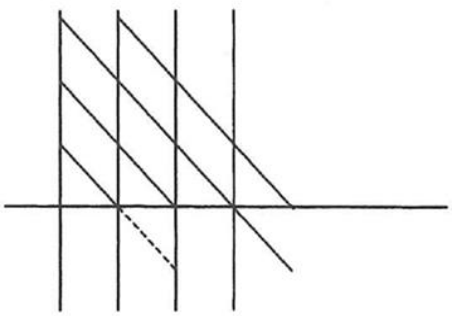


図 C（XXXIII 33）

4.3. フッサール現象学における時間論と他の議論との関係

以上を踏まえて、最後に、存在論、判断論、自我論、他者論との関係を指摘する。もっとも、これらはあくまで一例である。他の議論との関係も当然あり得るし、本稿が提示したものとは異なる関係を指摘することも可能であろう。

4.3.1. 存在論、判断論

時間論と存在論は客観的時間を介して関連付けられ得る。

上でも確認したように（第二章第二節、第四章第二節など）、知覚（および想起・予期）された対象は客観的時間に位置づけられ、他方で空想された対象は疑似‐客観的時間に位置づけられ、通常の客観的時間には位置づけられない。すなわちこれは、知覚対象（これは現実的な対象とも言い換えられるだろう）と空想対象という二種類の存在者のそれぞれの存在性格を、それらがどのような時間に位置づけられるかに応じて区別しているということだと解釈できる。

さらに、数学などが扱う対象、「悟性対象 Verstandesgegenständlichkeit」（EU 303）も

19. 図表を折り曲げなければならない理由について、本稿では説明できなかった。ごく簡単に述べると、フッサールは『ベルナウ草稿』において、いかにして現在ひいては過去と未来が特徴づけられるかという問いに答えている。これに関しては詳しくは柳川[2017]を参照してほしい。紙を山型に折り曲げるのは、現在の特異性をフッサールなりに表現しようとした結果である。

客観的時間との関係で理解できる[20]。たとえば数学的判断「2×3＝6」を例とすると、ここで判断の対象となっているもの（「2×3＝6」という命題）は、一見、時間的性格を全く持たないように見える。これに関してフッサールは、判断の体験（たとえば、「二掛ける三は六である」と判断すること）と判断の対象（「2×3=6」という命題、悟性対象）を分けた。そのうえで、時間的、ひいては空間的・自我的には異なる諸々の判断の体験を通じて、そのような体験を通じてのみ、常に同一の判断の対象が志向されているのだと考えた。つまり悟性対象は、単に時間的性格を持たないものとしてではなく、客観的時間上の異なる位置における体験に依拠しつつ常に同一の仕方で現れるものとして解釈されるのである。悟性対象のこのあり方は、「超時間性 Überzeitlichkeit」や「遍時間性 Allzeitlichkeit」と呼ばれ、「やはり時間性の一様態」だとされる（EU 313）。ここでも、悟性対象という存在者の存在性格の規定に、客観的時間が重要な役割を果たしている。

以上のように、存在者の存在性格の規定に際し、客観的時間が重要な役割を果たしている。

時間論と判断論も客観的時間を介して関係している。

ただちに言えることとしては、判断体験の対象としての命題は上述の遍時間性という性格を持つ。なお、上では「2×3=6」という普遍的に真であるような命題を例としたが、命題の真偽とは関係なく遍時間性は成立する。フッサールは「自動車は最も速い交通手段である」という、時代や場所によっては偽になるような命題も遍時間的だと述べている（EU 313-314）。

時間論と判断論のもう一つの関係は判断の基体に関するものである。客観的時間であろうと疑似 - 客観的時間であろうと、各々の時間位置は個体性を持つ（第四章第二節を参照せよ）。これは、それぞれの客観的時間に位置づけられる対象の個体性の根源とされる（X 64）。つまり、知覚においても空想においても、対象はそれぞれの客観的時間に位置づけられることによって個体として成立する。この個体に関して、『形式論理学と超越論的論理学』では「およそ考え得るかぎりの判断はどれも最終的には（明確にせよ不明確にせよ）個体的な（最も広い意味で実在的な）対象と関係している」（XVII 212）とされている。つまり、判断は最終的には何らかの意味で世界の中の個体的な対象に関するものであり、この個体的な対象の成立に際して客観的時間が不可欠な役割を果たすのである。

20. これに関して、上では『経験と判断』第 64 節（EU 303-317）に依拠したが、『時間意識講義』の補遺 XIII にも、やや未熟ながら、同じ問題を扱った議論が見られる（X 130-134）。

以上の二重の意味で、時間論と判断論は客観的時間を介して関係している。

4.3.2. 自我論、他者論

自我論と時間論は体験流を介して関連付けられ得る。

第四章第一節で述べたように、一つの体験流には一つの純粋自我が対応する。これはかつて行った決心や判断などを担う「習慣の基体」としての性格を持つ。

たとえば、「政治家になる」と決心した場合、あるいは「民主主義は最高の政治形態だ」と判断した場合、これらの決心・判断は、破棄されない限りは、これらを遂行した純粋自我を持続的に規定し続ける（当該の決心・判断に沿って行為したり新たな決心・判断を下したりする）。そして、このような習慣の基体としての純粋自我に基づいて、固有の具体的な性格を持った人格的自我が成立する。

さらに、フッサールは時間の「深層」として体験流の自己構成に先立つ「生き生きした現在」を想定したが、Held[1966]によれば、これはある種の自我のあり方として理解され得るのだという（Held[1966 63, 94 etc.]）。ただし、ここで言う「自我」とは、もはや上述の純粋自我ではなく、意識が生き生きと働いていることそのもの、意識の生動性とでも言うべきものである。これに関連して、田口[2010]は生き生きした現在と原 - 自我の構造的類似性を指摘している（田口[2010 212-219]）。

以上のように、体験流の相関者として純粋自我が想定され、また体験流の自己構成の根源としての生き生きした現在もある種の自我として理解される。以上の二点において、時間論と自我論の連関を指摘できる。

最後に、時間論と他者論は客観的時間と体験流の二点で関係する。

第二章第一節や第四章第二節でも述べたように、フッサールの言う客観的時間には、客観が位置づけられる時間という意味と、どの意識にとっても同じように超越的に存在する（超越的、間主観的）という意味があるが、他者論と関係するのは後者である。そもそもフッサールにおける他者は、私と同じ世界、それも客観的自然としての世界を共有している意識という性格を持つ（I 149 etc.）。この客観的自然の形式としては客観的空間と客観的時間が考えられる。つまり、他者が同じ客観的時間を共有しているという点に関して、時間論と他者論は関連付けられ得る（XV 331-336, 337-361, etc.）。もっとも、この文脈ではむしろ空間の役割の方が重要かもしれない。

他方、体験流を介した時間論と他者論は上記とは異なる様相を呈する。上で述べたように（第四章第一節）、一つの体験流には一つの純粋自我が対応し、異なる体験流に属する二つの体験には異なる二つの純粋自我が対応する。このことから、他者とは

私と体験流を共有しない自我である、他者とは私の体験とは統一され得ない体験を遂行している自我である、という定義が引き出せる。これは先ほどの、共通のもの（客観的時間）を共有する意識、という定義とは反対のもののように見える。

まとめると、時間論と他者論を客観的時間という軸に照らして見た場合、そこでは他者と私との共通性が際立つ。他方で、体験流を介して時間論と他者論を関連付けた場合、言ってみれば、そこでは他者と私の相容れなさが浮き彫りになる。とは言え、これは両立不可能な矛盾であり、したがってどちらかが間違っている、ということを意味しているのではないだろう。論者の見るところ、これはむしろ他者の両義性に他ならない。このように見ると、他者論を時間論に照らして論じることで得られるものは少なくないのだろう[21]。

おわりに

以上、ごく簡単にではあるが、体験流を軸としてフッサールの時間論を概観した。もちろん、これは可能な整理の一つでしかなく、他の概念を中心にした概観も可能であろう。実際、たとえば後期時間論の「歴史」の問題を本稿では扱えなかった。また、今回扱った諸問題に限ったとしても、別の説明の仕方、別の関連付け方があり得る。さらに、できるだけ中立的な説明を心がけたつもりだが、論述には偏りが残っているだろう。ただ、以上の不完全さを念頭に置けば、読者自身がフッサール時間論に取り組む際、本稿はごく簡単な地図程度には役に立つと信じている。

フッサール時間論に取り組む人が増えるのなら（そこで本稿が多少なりとも役に立つのであれば）、論者としては嬉しい限りだ。

凡例

・引用はすべて拙訳による。ただし、邦訳があるものに関しては参考にした。
・引用文中の〔　〕は論者による補い、〔＝　〕は論者による言い換え、〔…〕は中略を表す。なお、原文におけるフッサールの隔字体強調は傍点強調とし、それ以外の

21. レヴィナスが折りに触れて時間と他者を関連付けて論じていたことも想起すべきだろう。もちろん、時間論と関連付けることで他者論のすべてを汲み尽くせるわけではない。他者論の諸側面に関しては、鈴木[2021]が詳細に論じている。

記号に関しては変更していない。

参考文献

- Bd. I: *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*, hrsg. von Stephan Strasser, 2. Auflage, Neudruck, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1973. [=I]

（邦訳）『デカルト的省察』、浜渦辰二訳、岩波書店、2001 年。

- Bd. III: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erste Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*, neu hrsg. von Karl Schumann, 1. Halbband: Text der 1. -3. Auflage, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1976. [=III/1]

（邦訳）『イデーン I-ii』、渡辺二郎訳、みすず書房、1984 年。

- Bd. X: Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins (1893-1917), hrsg. von Rudolf Boehm, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1966. [=X]

（邦訳）『内的時間意識の現象学』、立松弘孝訳、みすず書房、1967 年。
『内的時間意識の現象学』、谷徹訳、筑摩書房、2016 年。

- Bd. XVII: *Formale und Transzendentale Logik*, hrsg. von Paul Janssen, The Haag, Martinus Nijhoff, 1974. [=XVII]

（邦訳）『形式論理学と超越論的論理学』、立松弘孝訳、みすず書房、2015 年。

- Bd. XIX/1: *Logische Untersuchungen, Zweiter Band, Erster Teil: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, hrsg. von Ursula Panzer, The Hague / Boston / Lancaster, Martinus Nijhoff, 1984. [=XIX/1]

（邦訳）『論理学研究 4』、立松弘孝訳、みすず書房、1976 年。

- Bd. XXXIII: *Die Bernauer Manuskripte über das Zeitbewusstsein* (1917/18), hrsg. von Rudolf Bernet und Dieter Lohmar, Dordrecht / Boston / London, Kluwer Academic Publishers, 2001. [=XXXIII]
- Husserliana Materialien Bd. VIII: *Späte Texte über Zeitkonstitution (1929-1934). Die C-Manuskripte*, hrsg. von Dieter Lohmar, Dordrecht, Springer, 2006. [=Mat. VIII]
- Husserl, Edmund, *Erfahrung und Urteil Untersuchungen zur Genealogie der Logik*, ausgearbeitet und herausgegeben von Ludwig Landgrebe, Prag, Academia Verlagsbuchhandlung, 1939.

（邦訳）『経験と判断』、長谷川宏訳、河出新社、1975 年。

- Brentano, Franz [1968], *Psychologie vom empirischen Standpunkt. Mit ausführlicher Einleitung, Anmerkungen und Register*, hrsg. von Oskar Kraus, Hamburg, Felix Meiner.
- Dodd, James [2005], “Reading Husserl’s Time-Diagrams from 1917/18”, in *Husserl Studies*, Vol. 21, No. 2, Springer, 111-137.
- Held, Klaus [1966], *Lebendige Gegenwart*, Den Haag, Martinus Nijhoff.

（邦訳）『生き生きした現在』、新田義弘・小川侃・谷徹・斎藤慶典 共訳、北斗出版、1997 年。

- Ingarden, Roman (ed.) [1968], Husserl, Edmund, *Briefe an Roman Ingarden. Mit Erläuterungen und Erinnerungen an Husserl*, Den Haag, Martinus Nijhoff.

（邦訳）『フッサール書簡集 1915‐1938　フッサールからインガルデンへ』、桑野耕三・佐藤真理人訳、せりか書房、1982 年。

- Kortooms, Toine[2002], *Phenomenology of Time*, Dordrecht / Boston / London, Kluwer Academic Publishers.
- Rodemeyer, Lanei, M [2006], *Intersubjective Temporality*, Dordrecht, Springer.
- Zahavi, Dan [1999], *Self-Awareness and Alterity*, Evanston, Illinoi, Northwestern University Press.

（邦訳）『自己意識と他性』中村拓也訳、法政大学出版局、2017 年。

- Zahavi, Dan [2003], *Husserl’s Phenomenology*, Stanford, California, Stanford University Press.
- 榊原哲也[2009]、『フッサール現象学の生成　方法の成立と展開』、東京大学出版会。
- 佐藤大介[2019]、「反省の問題は本当に問題なのか」、日本哲学会編、『哲学』、70 号、220-234 頁。
- 鈴木崇志[2021]:『フッサールの他者理論から倫理学へ』、勁草書房。
- 谷徹 [1998]、『意識の自然』、勁草書房。
- 柳川耕平[2017]:「『ベルナウ草稿』における二重の予持」、『現象学年報』、日本現象学会、第 33 号、101-109 頁。
- 柳川耕平[2021]:「初期および中期フッサール時間論における時間位置の個体化について」、『立命館哲学』、立命館哲学会、第 32 集、119-140 頁。